

ジョージ・ハリスンを追悼する

四方田 犬彦

二〇〇一年十一月二十九日、サンフランシスコでジョージ・ハリスンが五十八歳の生涯を閉じた。長く音楽活動から退き、闘病生活を続けた後のことであった。

彼はリヴァプールの労働者階級の家庭に生まれ、十歳代でジョン・レノンやポール・マッカートニーと知り合い、後にビートルズと呼ばれるバンドを結成すると、もっぱらギタリストとして活躍した。「ファイル・マイ・ギター・ジェントリー・ウィーブス」「サムシング」「マイ・スイート・ロード」と、ただちに彼が作詞作曲を手掛けた有名な曲のフレーズが口を突いて出てくる。だが八〇年代のいつごろからか、彼がいつたい何をしているのか、ほとんど情報が入ってこなくなっていた。わたしはジョージが遺した一番最後のレコーディングが何であったかを、この追悼文を書いている今、知らないでいる。もちろん

人々に尋ねればすむことなのだが、この距離感では彼がなれば世捨て人として、すでにとうの昔からわれわれの視界から外れたところに向かっていたことを意味している。二十世紀の音楽史を塗り替えたといわれるこの神話的ロックグループが解散したとき、彼はまだ二十七歳でしかなく、それから三十年以上の時間をソロギタリストとして過ごさなければならなかったのだ。栄光あふれる余生があまりにも早く到来してしまったとき、人間はそれをどう受け入れていけばいいのだろう。

ジョージ・ハリスンは盟友だったジョン・レノンのように、イギリス社会と文化に対して露骨な挑発や攻撃的な諷刺を行なったわけでもなく、ポール・マッカートニーのようにアイルランドがアングロサクソンと出会う都市リヴァプールを、ノスタルジックに歌い上げるということにも関わらなかった。まし

てリンゴ・スターのように、スタンダードナンバーを歌って、ポピュラーミュージックの伝統に回帰することにも、まったく無関心を示した。若き日の彼をとらえたのはインドをはじめとする東洋の哲学であり、シタールに代表される未知の楽器だった。「マイ・スイート・ロード」では、最初「ハレルヤ、ハレルヤ」と歌っていたバックコーラスが、いつからか「ハレクリシュナ、ハレハレ」と、ヒンドゥー教の神の名を口にするようになる。ジョージのなかではこのふたつの神格はけっして対立しあうものではなく、むしろ平和裏のうちに融合し、人間に謙虚の徳と物質世界からの解放を論ず点において、等しい存在であるように考えられていた。七〇年代になって彼が単独で世に問うたアルバムのひとつは『物質世界に生きて *Living in the Material World*』と題されている。ちなみに彼が六〇年代後半にモロツコでも日本でもなく、旧英領植民地であったインドに深く魅惑されたことや、ビートルズのなかでただひとりインドに積極的な関心を示さなかったリンゴが、植民地インドで挫折して帰国したイギリス人の子弟であったことは、ポスト植民地時代の文化状況を考えるさいに興味深い挿話であると、わたしは思う。

ジョージがインドの哲学と音楽に深い関心を抱き、しばしばインドを訪れたり、シタールの師であるラヴィ・シャンカールの故郷ベンガルを襲った戦乱と飢饉のために救援コンサート『バングロデシ』を開催したことは、よく知られている。だ

が東洋哲学がもつ瞑想的内面への志向は、すでにビートルズがステージでの演奏活動をいっさい止め、録音室に閉じこもってテープ編集を通して新曲を制作するようになったときには、ジョージに顕著であったように思われる。

一九六七年に『レディ・マドンナ』がシングルカットされたさいに、そのB面に目立たぬかたちで控えていた『ジ・インナー・ライト』The Inner Light という、2分ほどの短い曲である。まだまだシタールを習い立てのジョージが、そのもの珍しい音色を爪弾いているだけで、けっして後の「ウイズイン・ユー、ウイズアウト・ユー」のように堅固な構造をもった曲作りに至っているわけではないが、A面に収められたポール・マッカートニーによる聖母マリア讃歌へのパロディと比較してみると、いかにもここにジョージに独自の探求の萌芽が覗いていて興味深い。それはリヴァプールでカトリック的な環境に育ったポールが、後に「レット・イット・ビー」で大きく展開されることになるアイリッシュネスを、「レディ・マドンナ」のなかでパレスクとして体現しているのと、まったく対照的である。「ジ・インナー・ライフ」の歌詞を引いてみよう。

Without going out of my door

I can know all things on earth

Without looking out of my window

I could know the ways of heaven

The farther one travels
The less one knows

高校時代になにげなく聴き過して来たこの歌詞が、実はアースー・ウェイリーの翻訳による『老子道德経』の一節(第四七章)であると知ったのは、まったくの偶然のことからであった。ずいぶん後になってペンギン・クラシックスの黒い本の頁を捲っていて、突然に見慣れた記憶のある詩行が飛び込んできたので慌てたのである。わたしは最近のビートルズ研究の進展ぶりを知らないから、それがすでにどこかで論じられていることかどうかを知らない。だが、この事実がわたしを深く驚かせたことは事実である。それはジョージがビートルズ時代にすでにタオイズムに接触していたことが判明したこともあるが、これまでわたしの知的渉獵のなかでおよそ方向を異にし、交差することがないと考えられていたウェイリーとビートルズというふたつの固有名詞が、期せずして中国の古典を媒介として出会っていると知ったことためでもあった。ちなみに福永光司による訓読『老子』下、朝日新聞社文庫、一九七八、五九頁)で、同じ箇所全体を引いてみよう。

戸を出でずして天下を知り、^牖を窺わずして、天道を見る。其の出すること^弥いよ遠くして、其の知ること^弥いよ少なし。是を以て聖人は、行かずして知り、見ずして^名つけ、^為さず

して成す。

一九六〇年代の中頃、狂騒の連続であった演奏旅行にすっかり嫌気がさして、スタジオの奥深くに閉じこもってしまったビートルズの面々にとって、この一節が慰安と瞑想への導きとしてどう受け取られたかは、容易に想像がつく。とりわけジョンやポールのように派手派手しい活躍の才能に恵まれているわけでもなく、どちらかといえば寡黙にギターを弾き続けることを好んでいたジョージにとって、それがある時期、行動の指針であったということも、もはや言葉を重ねるまでもあるまい。だが「ジ・インナー・ライト」の歌詞は、まだジョージが、相棒のジョンやそのライヴァルであったボブ・ディランのように、作詞家として独力で内面的世界を表現できる段階にまで到達していなかったことをも、示している。彼はそのためウェイリーの翻訳をそのまま借りてくるしかなかったのだろう。ジョージがその方面で独自の頭角を示すようになるのは、ビートルズが解散してしばらく後に、一九七〇年に発表された3枚組のアルバム『オール・シングス・マス・ト・パス』あたりからである。

Sunrise doesn't last all morning

A cloudburst doesn't last all day

Seems my love is up

And has left you with no warning

But it's not always gonna this grey

All things must pass

All things must pass away

夜明けの光は朝の間続きはしない

ふいの土砂降りも終日続きはしない

愛もまた盛り上がり

予告もなしに終わってしまった

けれど灰色の日々はいつか終わる

すべては過ぎゆく

すべては過ぎ去ってしまう

表題作である「オール・シングス・マスト・パス」の冒頭である。ビートルズが活躍中だった一九六八年にすでにこの曲は完成していたと伝えられるが、恐ろしい達観といわざるをえない。わずか二十六歳かそこでこうした歌詞を書いてしまうところに、この人の不幸があったように思われる。あまりにも若くして余生を生きることを強いられてしまうと、いかに残酷なことだろう。

そう、ビートルズの面々は残らずこうした状況を生きることを余儀なくされた。ジョンは夭折し、ポールはひたすら過去のヒット曲をコンサートで歌いまくり、リングオはアルコールに耽溺した。ジョージはどこまでも若き日に獲得した達観の姿勢を

崩そつとせず、彼のいうところの物質世界を忌避して友情と瞑想に生きよつとしたが、その実はけつして生易しいものではなかったように思われる。おそらく彼が晩年にもっとも近いところにあつたのは（もし読んでいればの話であるが）ショーベンハウエルの哲学ではないだろうか。わたしはジョージがかくも傾倒していたインドの知識人が、彼をどのように追悼したのかを知りたいと思う。

ビートルズについて書くのは二度目のことで、最初は一九八〇年の十二月にジョン・レノンが射殺されたときにどこかの大学の新聞に追悼を書いた。それから二十一年の歳月が経過して、一番目の死者を追悼することになった。高校時代に友人とバンドを組んで「サムシング」とか「アイ・ウォナ・ビー・ローマン」とかを演奏していた者として、わたしは確実にひとつの時代が過ぎてしまったと思う。いや正確にいうならば、それはとうの昔に過ぎ去ってしまったのであつて、ただそれを改めて思い知らされたという話にすぎないのであるが。残余は感傷